

# 干潟生物の市民参加型調査と人材育成プログラム～「調査リーダー研修会」～

\*佐々木美貴<sup>1)</sup>・中川雅博<sup>1)</sup>・鈴木孝男<sup>2)</sup>

(<sup>1)</sup>日本国際湿地保全連合(WIJ)・(<sup>2)</sup>東北大)

## 1. 人材育成プログラム「調査リーダー研修会」の背景と目的

日本国際湿地保全連合(WIJ)は2008年度から「干潟生物の市民調査」事業を継続的に実施していることを本学会第2回大会で報告した。この事業は、干潟域に生息する底生動物に、地域の人々が広く関心と興味をもたせ、環境保全の意識が高まることを期待するもので、専門家や環境NGOの協力を得て、すでに全国の干潟で活動を展開している。その実施にあたっては、まず、干潟生物を市民レベルでも把握できる方法(「干潟生物の市民調査」)を普及させることが目標のひとつであった。この目標は、自然科学系の雑誌等で紹介することや、関係者にガイドブック等を配布することにより、おおむね達成することができた。

WIJでは、つぎに、干潟調査を実行・指導できる人材不足の解消に取り組んだ。この人材不足は、①適切な教材がないため、多様な底生動物の「種同定」が難しいことと、②アマチュアと専門家をつなぐレベルの研修会を受ける機会が不足していることを主たる原因と考えた。そこで、現在、次に示す a)ガイドブックやDVD等の「教材作成」と、b)「調査リーダー研修会」の開催を進めている。

## 2. 教材作成

2008年から2011年9月現在までに、次の教材を作成・配布した。①『干潟底生動物調査ガイドブック～仙台湾沿岸域編～』(2008年3月)、②『干潟生物調査ガイドブック～東日本編～』(2009年3月)、③「干潟市民調査の方法」(DVD)(2009年3月)、④実物大ラミネート図鑑(下敷き2枚組、巻貝類、二枚貝類、カニ類、甲殻類とユムシ・ホシムシ・ナマコ類(2009年3月)、⑤初心者向けパンフレット「干潟のいきものをさがしてみよう」(2010年6月)、⑥『干潟生物の市民調査』事務局運営マニュアル2010(2011年3月)、⑦『干潟生物の市民調査』データ集2010(2011年3月)

## 3. 「調査リーダー研修会」の開催と「干潟生物市民調査」の実践

2008年から現在までに、松川浦(福島県)、小櫃川河口干潟(千葉県)、藤前干潟(愛知県)、和歌浦・有田川河口干潟(和歌山県)、球磨川河口干潟(熊本県)で延べ10回以上にわたり研修会もしくは市民調査を実施した。研修会では、調査手法の習得のみならず、種の同定、市民調査の参加者にわかりやすく説明する技術を養うことを目的とした。2011年度には小櫃川での研修会で、①調査手法・同定技術の初歩を習得する「基礎コース」、②わかりやすい説明法の訓練をする「上級者コース」を設けた。リーダー研修会を本格始動させた2010年度と合わせて、すでに24名が「基礎コース」を修了し、そのうちの5名が「上級者コース」を受講し、調査リーダーとして市民調査を主導する者も育っている。

## 4. 「干潟生物の市民調査」事業の課題と今後の展開

現在、調査リーダーは、①事前準備、②調査進行、③種の同定補助、④結果整理、⑤参加者への結果報告等を行っている。③については、各リーダーが独学で参加者をサポートできるように努力を続けているが、苦手分類群については、さらに専門家のサポートを受け、同定精度を保つようにしている。

これから取り組むべき主要な課題は、a)単位認定制度によるリーダーのスキル評価、b)補助教材の充実、c)得られたデータの一般公開、の3点である。とくに、補助教材は、調査リーダーが自ら作成することによって、調査の際に活用しやすいものができることを期待している。将来的には、(1)さまざまな立場の人たちによる、地域全体で取り組むための体制整備、および(2)よりいっそう広範囲での調査実施を目指したい。(1)については、例えば、小中学生やシニアを対象としたプログラムの構築が挙げられる。